

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 25 日現在

機関番号	32665
研究種目	若手研究（B）
研究期間	2011～2012
課題番号	23720150
研究課題名（和文）	1930年—70年代までのブラジル、アリアンサ地区における 日系移民の活躍
研究課題名（英文）	Political stance of Japanese immigrants in Alianca, Brazil from the 1930s through the 1970s
研究代表者	
	牧野 理英（MAKINO RIE）
	日本大学・商学部・准教授
	研究者番号：10459852

研究成果の概要（和文）：1930年代から70年代にかけてブラジル、サンパウロ州アリアンサ移住区にてキリスト教社会主義の日系移民農場を創設した日系一世（弓場勇）、およびその理念を信望した一派に関する資料をブラジル、アメリカ合衆国にて収集する。そして日本、アメリカ、ブラジルにおいてこの移民一世らの活躍の捉えられ方の相異に注目することで、この移民集団がブラジルの国政とどのように関わりあって形成されているかを日本人研究者の視点から提示し、現在の北米中心の移民研究にトランスナショナルな視点を投じるというものである。

研究成果の概要（英文）：This study explored the political stance of Japanese immigrants in the Alianca district of Brazil from the 1930s through the 1970s. It particularly focused on the first generation of these immigrants, who established immigrant colonies in Brazil during the period of Japanese imperialism and shared the founders' form of Christianity. The research included collecting and analyzing historical documents regarding Isamu Yuba, the founder of Comunidade Yuba, who neither belonged to Japan nor Brazil under US influence during and after WWII. This study presented a transnational perception of Isamu Yuba and shed light on the current immigrant studies in Japan, the United States, and Brazil.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	700,000	210,000	910,000

研究分野：英語圏文学

科研費の分科・細目：文学，英米・英語圏文学

キーワード：日系移民、アジア系アメリカ文学、ブラジル、アメリカ、日本、第二次世界大戦

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本における日系ブラジル人に関する話題は今日盛んに論じられているものの、国際的な視野を意識した日系ブラジル研究の歴史的、文化的、学術的背景はまだ浅い。確かに日本では前山隆などの著名な研究者の名前があげられるが、国際的な枠組みで知られているものは主に北米の研究者達によって執筆された英文の研究書であると言っても過言ではない。

(2) 牧野理英は2006年にアメリカ合衆国アリゾナ州立大学大学院英文学科に提出した博士論文の第四章において前述したカレン・テイ・ヤマシタの歴史小説、『ブラジル丸』*Brazil-Maru* (1992) を取り扱った。そしてその後、ヤマシタと2006年に明治大学におけるシンポジウムで会見した際、作家本人から『ブラジル丸』の主人公カンタロウ・ウノには、本研究の対象であるサンパウロ、アリアンサ地区で活躍した日系一世のイサム・ユバ(弓場勇)というモデルがいるという情報を得たのである。ヤマシタはカリフォル

ニア大学サンタクルス校文化人類学科在学中に奨学金を得た後、日系移民に関する実地調査でブラジルに渡ったが、その時の調査を基に書きあげたのがこの『ブラジル丸』である。小説におけるカンタロウという登場人物は、当初は理想に燃える日系移民コミュニティー、エスペランザの指導者であるが、後年になるにつれ、自らの私利私欲のためにエスペランザを破滅へと導く帝国主義的な日系移民の独裁者として描かれている。むしろこの作品は小説であるため、カンタロウ・ウノをイサム・ユバと同一視するのは短絡的解釈であるが、カンタロウ・ウノに集約されるイサム・ユバに対するこのような見解は、ヤマシタの日系アメリカ作家という立場からの日本の植民地主義に対する批判であるといえよう。

小説であるため表現の自由はあるものの、こうした日系移民表象のみがアメリカ文学で主流となっている事実は、アメリカ文学を日本の大学で教える牧野にとって遺憾な限りである。移民表象とは多角的に研究される分野であり、日本人研究者からのブラジルの日系移民に対する見解の提示は極めて重要である。

アリアンサ地区のイサム・ユバの経営するユバ農場、およびその周辺の日系農場は創設当初から武者小路実篤による大正期の社会主義的・人道主義的思想を土台としており、永住を目的とした中産階級知識層の移住者が多く、当初から俳句や短歌など短詩文学の活動が盛んであり経済的に安定した知識階級でユートピア的思想をもっていたと考えられる。しかしこの地区の日系共同体に関する研究はインターネットなどで非公式に知られるにすぎない。こうした状況からも日本、アメリカ、そしてブラジルにおける文献からこの移民集団が欧米諸国の政策をどのような形でブラジルにおいて応用し、日本とどのような関係を保ち、どのような立場をブラジル社会において築いていったのかという問題を日本人研究者の視点から分析していきたい。

2. 研究の目的

北米における日系移民の歴史には、プランテーション労働、第二次大戦では強制収容所といったアメリカという「帝国」によって「抑圧された」集団的な共通の記憶が根底にある。一方、南米ブラジルの日系移民の歴史は、日系アメリカ人のような欧米列強の帝国主義における「抑圧された」人種的立場を必ずしも維持してはいない。特に第二次世界大戦以降、特に1970年代の高度経済成長期における日系移民は、欧米の経済政策を模倣して世界的に活躍していこうとする超国家的な帝

国主義を展開している。しかしこうしたイメージも年代や地理的位置によって多面的な角度から研究される必要性があり、現在はアメリカ、ブラジルでの研究者の意見が全面的に出ているにもかかわらず、国際的視野における日本研究者としての日系ブラジル移民の視点は乏しい。

1930年代-70年代にサンパウロのアリアンサ地区へ移住した日系移民に関する研究を日本で行う意義は、第二次世界大戦を経過したそのトランスナショナルな移民主体を第三世界における日本人移民という立場から見直し、その移民主体が必ずしもブラジル国家においてアメリカ本土の日系集団のような形式で抑圧されていたわけではないということを証明し、日系移民主体に関する多面的理解に貢献するというものである。北米における日本対欧米といった二項対立的力関係に対し、南米の日系移民主体は第三世界という新たな基軸が導入されることにより、その複雑でユニークなトランスナショナル性を露呈している。

一方ブラジルの国民性には、1920年代後半から発展したブラジル・モダニズムにみられる人種のカニバリズム（食人宣言）が具現しているように、アメリカとは異なり、人種混合を奨励し、新しい種族と交わることで、よりその国家的文化復興に役立てるといった気質が根底にある。このようなカニバリズムに代表されるブラジルの国民性との交錯点において、日系移民主体は極めて特殊なアイデンティティを形成していたと予測される。その一例として前述した日系移民共同体である弓場農場、およびその周辺の日系移民農場を探っていきたい。

3. 研究の方法

まずアメリカへ赴き、カリフォルニア大学サンタクルス校のヤマシタ教授や現在ジョージア州エモリー大学準教授、ジェフリー・レッサーといった北米小説家および研究者の日系移民に関する見解をインタビューなどで収集する。彼らの著書はすでに入手しているので、インタビューでは彼らのフィールドワーク時における詳細などを聞く予定である。牧野はヤマシタとレッサーとは面識があるため、面会の予定はすでについている。

（レッサーに関しては彼の著作である *A Disconcerted Diaspora* を牧野は2009年に書評している。）次にブラジルのサンパウロへ赴き、サンパウロ側とアリアンサ側（農場側）における日系共同体、ユバ農場に関する意見を収集する。これは2008年3月に申請者が日本大学商学部の研究助成金（海外派遣短期B）でユバ農場へ赴いた際、サンパウロ側とアリアンサ側でこの日系農場に対するとら

え方が異なっているという事実を得たためである。しかし資金上の関係からユバ農場以外の農場には行けず、実質上この農場には三日、サンパウロには総計一週間しか滞在できず、十分な資料収集、およびインタビューができなかったため、今年度の滞在でこうした意見の相違をより細かく収集し多角的に検討する。特にユバ農場周辺の他の日系農場にも訪問する予定である。ユバ農場では、アリアンサ地区の日系移民に関する日本語の文献（日本においては入手不可能である）の分析をする。牧野はインターネットサイト Discover Nikkei の作成者の一人、バージニア州、レキシントンにあるワシントン・リー大学（Washington and Lee University in Lexington）日本語学科の Janet Ikeda 教授の推薦により、現在ユバ農場に在住する農場代表者兼広報担当の矢崎正勝氏に面会する。矢崎氏とのメール交信で、イサム・ユバに関する日本語で書かれた先行文献、『ユバ農場』（1981年7月15日発行、野添憲治著、無明舎）が、現在日本では絶版で入手不可能であるとの情報を得、牧野はアリアンサに赴き、この本を拝見させていただく。さらにイサム・ユバの弓場農場、および武者小路実篤の美しき村に感銘を受けた日系移民集団に関するポルトガル語の文献をブラジル、サンパウロ州サンパウロ大学の近くの CEJA P（ブラジル日本研究所）で入手する。

4. 研究成果

以下の(1)から(6)までは牧野が実際にインタビューを行った人々とその時の状況を記す。インタビューは筆記と録音による。公開に関しては本人の了承を得ている。

(1) 矢崎正勝氏との面会

2012年8月4日に弓場農場へ赴いた牧野は、まず共同体広報の矢崎正勝氏に面会し、今回の研究の目的、方法などを説明した（現在のユバの代表は・弓場ルイス・常雄である）。矢崎氏によると現在、弓場農場は様々な形で注目されているという。2008年にはNHK取材班による『につぼん 家族の肖像』が小学館文庫から出版され、弓場農場が大々的に取り上げられた。2009年には日大国際関係学部の准教授、福井千鶴氏が訪れ、日系移民共同体という枠組みの中でその著書『南米日系人と多文化共生』において短く弓場農場に触れている。さらに2012年、牧野の直前にもNHKなどのテレビ局の元報道員、大浦玄氏（滞在最終日に牧野はこの人物に面会することができた。後に記述）が訪問し、取材をしていたという。

しかし過去において、特に1970年代初め

でのNHK取材や、北海道TVの放映、或いは最近のブラジルTV取材によるものなどは弓場側にとってあまり不本意なものではなかったようだ。弓場農場は1935年から開拓精神を伴って、キリスト教社会主義を貫いた歴とした日系移民共同体なのである。こうした理解なしに、興味本位での取材、および弓場側の校正なしに出版、報道される番組、本などに関して、メディアに表出した以後、弓場側がそれを目にして心を痛めることも多々あるという。このような事態を避けるためにも、牧野は矢崎氏にこれから学会発表の原稿などを発表前にお送りし、内容を確認してから発表することを約束した。これは牧野の学会発表がアメリカで行われることが多く、英語の発表でもあるため、日本国内よりもより多くの人々の目に触れることが予想されるためである。（2012年8月8日 午前7時58分取材での会話から）

矢崎氏は弓場勇に1963—76年の間会っている。矢崎氏は弓場勇に傾倒しているながらも、その評価に関しては個人の自由であると寛容な姿勢を見せられた。そして事実を伝えることに関しては至って真摯な態度を見せられ、牧野なりの勇像を提示しても構わないということであった。但し間違った記載、曲解した事実を提示されるのは困るということで、そうした意味からも弓場側に対する牧野の原稿の開示は重要であると思われる。（2012年8月8日 午前7時取材での会話）

(2) ミランドポリスの日系の人々

まずアリアンサ到着4日当日はサンパウロ州ミランドポリスの第一アリアンサで『うどん会』があり、そこで弓場農場の人々から弓場勇のイメージに関して断片的ながら意見を聞くことができた。簡略ながら分析すると、まず弓場勇を直接知る人々はこの共同体代表に対し、一定の敬意を表し、代表としてのカリスマ的資質を評価する声が多かったのに対し、彼の死後に農場へ入ってきた人々は弓場勇の晩年にみられる独裁者的側面に言及し、批判的態度をもっていたという。しかし弓場勇自身に実際に会っていない共同体内の人間が、この人物を評価することは可能であろうか？推察の域を出ることのない評価は、アリアンサではなく弓場農場を出たサンパウロ側の人間の文献や風評などを基にしているとも考えられる。（2012年8月12日 午前9時57分の会話）

(3) 弓場勝重氏

弓場勇の娘の弓場勝重は現在60代で、現役の芸術家である。彼女は父勇を直接知るもっとも近い親族であり、弓場勇に関しては威怖を伴う感情を抱いていたとのことであった。彼女のそのような心情は著作として近々

出版される予定である。今回の訪問では、この本の原稿を2008年の時点で閲覧させていただいたが、今回の訪問においては加筆修正されたものをその場で拝読することを許可していただいた。幼少時代の弓場勝重氏の表現によると弓場勇は父親でありながら「おっかない人」であり、その威厳の強さが窺われる。(2012年8月7日午後1時の会話で)

(4) 小原明子氏

弓場農場でモダンバレエを教え、日本での公演も知られている小原明子氏は20代にダンサーとして活躍している際、彫刻家の小原久雄氏と知り合い、そのまま氏に付き添って弓場農場へ行った。当時の勇(55歳と思われる)に対しては、即座にこの農場でこの人物について行こうと思わせる一種のカリスマを持った人物であると言及した。また弓場勇に関して、一言でたとえるならば、政治家、芸術家、活動家、事業家、宗教家といったいずれの範疇にもあてはまりながらも、一つとしてその中に留まることのない、また男性という性別をも越えた、卓越した共同体のリーダーと表現した。(2012年8月10日 午後5時取材での会話で)

以下サンパウロでは予期せぬ形で弓場勇を知る人物に何名か直接面会することができた。ここでは了承を得ることのできた人物だけを紹介することにする。

(5) 宮尾進氏(サンパウロ人文科学研究所所長)

宮尾進氏に面会し、50年代当時の弓場勇のイメージに関して質問した。宮尾氏は10代初めの頃、第三アリアンサの渡辺農場におり、弓場農場にはよく遊びに行っていたという。宮尾氏は勇を無教会派と評し、今までに出会ったことのない特異な人物と端的に表現した。また自分はこの人物に対しては中立的な意見を持ち、勇を信望する人物はサンパウロの近くに大浦文雄という人物がいることも言及した。(2012年8月15日 午後3時取材の会話より)

(6) 大浦文雄氏

サンパウロ人文研はこの人物に即座に連絡をとり、その日のうちに牧野を大浦氏との電話で対応させ、次の日の夕刻の面会を可能にした。大浦氏は、牧野の研究に大変興味をもち、自動車で3時間かけてサンパウロのホテル、万里まで出向いてくださった。大浦氏は60年代に弓場農場に来訪し、その後そこから出てサンパウロ周辺に在住されている。彼に関してはNHKの元取材記者であった大浦玄氏(同じ大浦という姓であるが、両氏は縁戚関係ではない)が人物伝を出版しているほ

どの有名人であるが、今回大浦玄氏は弓場勇に関しての人物伝を執筆中であり、年末には出版する予定である。ヤマシタの弓場勇像とは違い、大浦玄氏は弓場勇を信望する大浦文雄氏の視点から新たに再評価される弓場像を提示するとのことである。大浦両氏のインタビューでは今後の弓場勇像に新たな側面を加える事実を得ることができたが中でも第二次世界大戦中のアリアンサの状態に関する勇の言葉が今回の海外派遣の最も重要な収穫といえる。それは以下の逸話である。第二次大戦中、勝ち組と負け組との対立がサンパウロで高まり、勝ち組のリンチ事件などが横行していた際、弓場勇は日本が負けたのか勝ったのかという問いに対し、「そんなことは問題ではない」と答え、両者を農場内にかくまったという逸話である。(2012年8月16日 午後5時28分取材の会話より)

これらのインタビューによってわかったことと今後の課題

なるほど小説『ブラジル丸』では勝ち組、負け組両者をかくまうカンタロウ・ウノ(弓場勇がモデル)の姿を垣間見ることができるが、その真意は明らかにされておらず、あくまでも小説内では、情報の行きとどかないブラジルの農場における共同体代表者の困惑ともとれる微妙な中立的立場が描かれていた。しかし実在する弓場勇の上記の中立的発言は、勝敗が問題ではなく、アメリカ側についてブラジルの日系移民がどのように次なる段階に望むのかという自律的視点を提示しており、積極的な発想であると考えられよう。共同体リーダーとして外の情勢に振り回されることなく、独自の路線を編み出すその姿勢に、卓越したリーダーシップを認識することができる。さらに大浦文雄氏は年齢に左右されることのない弓場の柔軟な思考は、現在過去を問わず若者の精神と共鳴し、導くものであるとも分析するが、それに最後までついていける若者はよっぽどの意思と覚悟がなくてはならないとも言及していた。矢崎氏も強調していたが、これは農場が駆け込み寺的な存在ではなく、自ら選んで弓場の思想に共鳴するという自律的決断をもった人物が集う場所であるということである。最後に、大浦文雄氏は勇を「青春時代の夢」と評した(2012年8月16日 午後7時26分取材の会話より)

さらに今回時間的余裕がなかったためできなかったこととして、矢崎氏が北原・輪湖記念館において保管してある弓場勇直筆の手紙や書簡の調査が残っている。次回の訪問の際に閲覧の許可をとり、見せていただくことにする。

(7) 実質的な成果

牧野は2011～2012年度科研費(若手B)において、一件の国際学会発表、そして一件の学会誌における論文掲載を達成し得た。

まず2012年1月11日アメリカ合衆国ハワイ、ホノルルにおいて第10回ハワイ国際人文・芸術学会(米ルイヴィル大学主催)で本課題を発表し、大変好意的な評価を得た。発表の後、コロラド大学、文学部日本文学科教授のジャニス・ブラウン氏が、今後他の国際学会においてパネルを組んではいかかかという申し出を受けた。これは若手研究者としては大変栄誉なことである。

さらにその後、牧野はアメリカ文学、アメリカ研究において日本の3大学会のなかでも最も規模の大きい、アメリカ学会に本研究をベースにした論文を2012年3月30日に出版することができた。この学会の自由投稿論文は競争率が高く、出版されることは今後その発展が期待される若手研究者の登竜門ともいえる学会誌である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

(1) 牧野理英「日本のサンタクロース：カレン・テイ・ヤマシタの『熱帯雨林の彼方へ』における非同化的日系主体とその贈与精神」『アメリカ研究』46号109-126. 2012年3月。査読有。

[学会発表] (計1件)

(1) Rie Makino, “Isamu Yuba: Karen Tei Yamashita’s Adoption of the Japanese Immigrant History in Brazil-Marú” Hawaii International Conference on Arts and Humanities 2012年1月11日、ホノルル(アメリカ合衆国ハワイ州)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

牧野 理英 (MAKINO RIE)
日本大学・商学部・准教授
研究者番号：10459852

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし